

園番号 712

平成30年度 奈良市立鶴舞こども園 研究実践概要

園長名 出原和美  
全園児数 48名

1. 研究主題 学びにつながる遊びの創造  
ー発見・感動・探究を引き出す環境構成と援助ー

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

昨年度の取組から子どもたちは園内の身近な環境に自らかかわって、自分のしたい遊びをしたり、発見や感動など心を動かす体験を基に「もっとこうしたい」「こうしたらもっとおもしろい」と自分の考えたことやひらめいたことを実現したりする姿が見られた。その過程で、環境や友達とより深くかかわりながら試行錯誤や工夫などの能動的な経験を通して遊びを創造していく楽しさを味わうことができた。保育者は子どもの発見・感動の姿を見逃さず興味や関心を探り、何を経験して学ぼうとしているのかを見極め環境を再構成することで子どもの探究心が育まれていった。今年度は、昨年度の子どもが環境にかかわって心を動かした瞬間をとらえ実現に向かうための援助を工夫したりして、遊びからの学びを明らかにしていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・認定こども園教育・保育要領が改訂され、幼児教育において育みたい資質・能力が明記された。本園では、豊かな自然や環境に子どもが自発的にかかわって遊ぶ中で発見・感動・探究などの豊かな経験を通して資質・能力を育んでいきたいと考える。それぞれの発達の過程にふさわしい環境構成や援助を意識して、子どもと共に遊びを創造していきたい。

②研究の重点

・研究主題について職員相互の共通理解を図り、指導計画の立案、実践と反省評価を積み重ねていく。  
・「奈良市こども園カリキュラム」に沿った子どもの発達の段階を捉え、子ども理解に努め、発見・感動・探究を引き出す環境構成や援助を考える。  
・園内外の様々な環境とのかかわりの中で、それぞれの経験を見極め、資質・能力の3つの柱を視点に分析を行い、これらの視点からの発達の姿を把握する。

③活動の方法

発見・感動・探究の子どもの姿

発見・感動・探究を引き出した環境構成

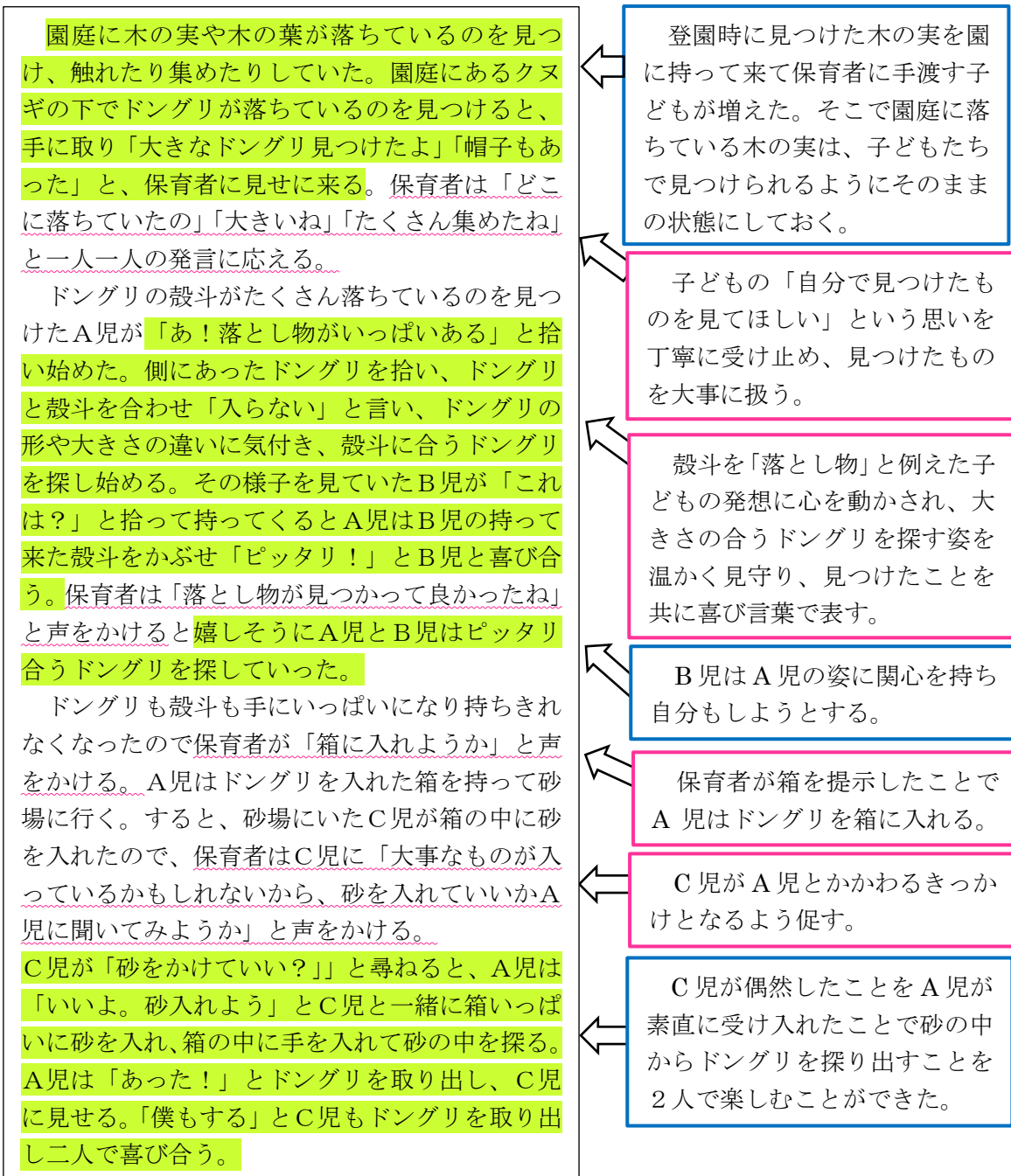
発見・感動・探究を引き出した保育者の援助

【実践事例1】 3歳児 『落とし物がいっぱいある』 10月

(ねらい) ○ 身近な秋の自然に触れ、かかわって遊ぶ。

○ 自分のしたい遊びを見つけ、友達や保育者やと一緒に遊ぶ。





(反省・評価)

- 子どもが能動的に環境にかかわることを願って、園内の環境をそのままにしたことで、子どもたちはドングリを見つけて集める楽しさを感じることができた。自分が手にした自然物を介して保育者や友達にかかわることででき、保育者が一人一人と丁寧に応答性のあるやりとりをすることで人とかわる喜びを味わえた。
- 友達とかかわって遊ぶ姿を保育者が温かく見守ったり、友達とかかわるきっかけを保育者がタイミングよく声がけしたりすることで、友達と新たな遊びを発見し、友達と同じ面白さを感じながら遊ぶことができた。

【実践事例2】 4歳児 『バッタって脱皮するの』 7月

- (ねらい) ○ 身近な生き物に興味や関心を持って世話をする。
- 自分の思ったことや気付いたことを言葉で伝え合う。



<p>園庭でバッタを捕まえては飼育ケースに入れて保育室に持ち帰る。捕まえたバッタをどうするか話し合いを持ちクラスで飼育することになる。</p> <p>毎日草や水を替えたりする中で、A児が「あっ、バッタが死んでいる」と大声をあげる。その声を聴いて数名の子どもたちも飼育ケースを覗く。B児「なんかこのバッタ透けている」と不思議そうに言うと他の子どもも「本当や」「脱皮とちがうか」と話す。A児は図鑑を持って来てバッタについて調べるが、「脱皮するって書いてない」B児も「こっこの図鑑にも載っていない」と話す。保育者も注意深く見入っているとA児「先生、これ脱皮したん」と尋ねる。保育者は殻を取り出し「虫メガネで見てみようか」と提案する。子どもたちは殻を虫眼鏡で見ながら「どこから出たのかな」「すごいな、足はそのままや」と気付いたことを話す。その後も脱皮が続き、その都度友達に伝えたり、一緒に虫眼鏡で見たりする。</p>	<p>バッタを捕まえるだけでなく飼育することで命や次につながっていることを感じてほしい。</p>
<p>ある日、D児が「みんな来て、バッタが立って草を食べている」と知らせると、「カンガルーみたいや」「バッタって立つんや」「手で草持っている」と初めて見る姿に驚く。B児は「騒いだらバッタ、ご飯食べへんようになる」と皆に話す。子どもたちは無言で飼育ケースを囲んでバッタを観察する。保育者は「みんなは図鑑にも載っていないことを発見したね、すごいね」と感心して子どもたちに話す。A児「本当や、虫博士になれる」と喜ぶ。その後、バッタの世話を自分からしようとする子どもが増え当番制にする。また、「バッタは立って草を食べるから草を立てて入れよう」「根っこから抜いて埋めたら立つよ」など、子ども同士伝え合いながら世話をする姿が見られた。</p>	<p>A児の発見は衝撃的で、バッタに何が起こったのかと子どもなりに解明しようとより目を凝らして観る。</p>
<p>保育者は「みんなは図鑑にも載っていないことを発見したね、すごいね」と感心して子どもたちに話す。A児「本当や、虫博士になれる」と喜ぶ。その後、バッタの世話を自分からしようとする子どもが増え当番制にする。また、「バッタは立って草を食べるから草を立てて入れよう」「根っこから抜いて埋めたら立つよ」など、子ども同士伝え合いながら世話をする姿が見られた。</p>	<p>子どもたちが知りたい・調べたいと思った時にすぐに行えるように身近に図鑑を置いておく。</p>
<p>保育者は「みんなは図鑑にも載っていないことを発見したね、すごいね」と感心して子どもたちに話す。A児「本当や、虫博士になれる」と喜ぶ。その後、バッタの世話を自分からしようとする子どもが増え当番制にする。また、「バッタは立って草を食べるから草を立てて入れよう」「根っこから抜いて埋めたら立つよ」など、子ども同士伝え合いながら世話をする姿が見られた。</p>	<p>虫眼鏡を使ってより関心を持って観たり、気付いたことを言葉にしたりしてほしい。</p>
<p>保育者は「みんなは図鑑にも載っていないことを発見したね、すごいね」と感心して子どもたちに話す。A児「本当や、虫博士になれる」と喜ぶ。その後、バッタの世話を自分からしようとする子どもが増え当番制にする。また、「バッタは立って草を食べるから草を立てて入れよう」「根っこから抜いて埋めたら立つよ」など、子ども同士伝え合いながら世話をする姿が見られた。</p>	<p>今まで園庭の草を引いては横にして飼育ケースに入れていたが、根っこから抜けた草が立った状態になっていた。バッタがその草にぶら下がるようにして草を食べている姿に気づき、皆に知らせた。</p>
<p>保育者は「みんなは図鑑にも載っていないことを発見したね、すごいね」と感心して子どもたちに話す。A児「本当や、虫博士になれる」と喜ぶ。その後、バッタの世話を自分からしようとする子どもが増え当番制にする。また、「バッタは立って草を食べるから草を立てて入れよう」「根っこから抜いて埋めたら立つよ」など、子ども同士伝え合いながら世話をする姿が見られた。</p>	<p>虫眼鏡を使ってより関心を持って観たり、気付いたことを言葉にしたりしてほしい。</p>
<p>保育者は「みんなは図鑑にも載っていないことを発見したね、すごいね」と感心して子どもたちに話す。A児「本当や、虫博士になれる」と喜ぶ。その後、バッタの世話を自分からしようとする子どもが増え当番制にする。また、「バッタは立って草を食べるから草を立てて入れよう」「根っこから抜いて埋めたら立つよ」など、子ども同士伝え合いながら世話をする姿が見られた。</p>	<p>子どもなりの発見や気づきから飼育の方法を考えて活かそうとする。</p>

(反省・評価)

- 昨年度はバッタを捕まえることに関心があり命が等閑にするという姿が見られた。その反省の基、子どもたちが自分からバッタのことを考え進んで飼育するようになってほしいと願っていた。保育者が子どもの気づきや発見、感動を受け止めたり、子ども同士で言葉にし合ったりする場を大事にすることで、飼育にかかわる子どもが増えた。
- バッタの生活や特長について体験を通じた知識を得たことで、飼育・観察の循環が子どもたちの中で定着し、飼育方法にも活かすようになった。

実践事例 5歳児 『アイってすごい』 4月～11月

- ねらい ○ 身近な自然に関心を持って関わり、試したり考えたりする。
- 経験したことをもとに、さらに自分なりに表現をする。



<p>4月、タデアイの種を子どもたちと撒き、栽培をした。毎朝水やりをする中で、生長したタデアイの葉を触り「柔らかいね」「アイの葉からも色って出のかな」とつぶやく。すると、たくさん茂った葉を「試しに1枚だけ取ってみよう」と手に擦り付けた。「緑の汁が手についた」と繰り返し、手に擦り付けた。緑の汁が手のひらや指などに付くことが面白く、友達と手の色を見せ合っているとA児が「あれ？緑じゃなくなってきた」「青みたいな色に変わってきた」「えー。不思議だね」と色が変化していることに気付く。そのA児の言葉をきっかけに、他児もアイの葉に面白さを感じ、遊びに取り入れる。昨年度の5歳児が遊びに使っていたものを思い出し、自分たちで必要な用具を保育者に求めたり自分たちで用意したりした。</p>	<p>昨年度遊びに取り入れていたパンジーやマリーゴールドの花だけでなく様々な植物から新たなを発見してほしい。</p>
	<p>今までの経験から葉の感触を確かめると、柔らかいので色が出やすいと確信した。気付いたことや考えたことを出し合っている姿を見守る。</p>
<p>白い布にアイの葉を置き、上から木槌で叩き色が出るのを試していた。しかし先日見られた緑から青っぽい色に変化する様子は見られず「白い布には緑の汁しか付かないのかな」と、以前手についたアイの葉の色が変色することを期待していたため、落胆しながら乾かした。しばらく経ってからもう一度その布を見ると、「あれ？乾いてきたら少しずつ色が変わってきたような気がする」「え？そうかな。さっきと変わってないよ」と微妙な変化について話している子どもたちの様子を見た地域の方が「その布を石鹸で洗ってみたらいいこと起こるよ」と教えてくださり、布を洗うと、藍色に変色した。「わあ、すごい！これにしたかったの」「アイって不思議」と思い通りの仕上がりになったことを喜び合った。</p>	<p>この葉を使って、今までにない色を出して遊びに取り入れたいという子どもの思いを受け止め、子どもと共に環境構成をする。</p>
	<p>時間が経てばその色が変化するという新たな発見をしたことで、自分たちでもっと試したり、探究をしたりしたいという気持ちを実現してほしい。</p>
	<p>安易に色が変化することを予想していたが、上手く行かなかったので、子どもと共に考える。地域の方が助言をしてくださり、思いを実現させることができた。</p>

(反省・評価)

- 意図的・計画的な栽培により、子どもたちの新たな発見や感動につながった。また、日頃から身近な植物に触れ、自分たちで必要なものを必要な分だけ調達しながら遊ぶことが定着していることにより、親しみを感じて遊びに取り入れることができた。
- 意図的な環境と子ども自らが発見し、探究したいと思う気持ちから構成した環境とがあることで子どもが主体的に活動するきっかけにつながった。

5. 研究の成果

- 3歳児は保育者が一人一人の発見や感動に共感し、友達とのかかわりへとつなぐことで、遊びが広がっていった。4歳児は飼育の中での発見を皆に伝えたり、解明しようと話し合ったりすることで子どもが主体的に飼育にかかわり知る喜びを感じたり知識を活かしたりできた。5歳児は保育者が意図的な見通しを持っていても、子どもたちが試行錯誤して思いを実現していく経験を大事にしたことで、豊かな学びにつながった。

6. 今後の課題

- 子どもの主体的な姿を見逃さずに、環境の再構成や援助の工夫を見極めていきたい。